

700号に寄せて

700号に寄せて



本号（第59巻第6号）で鹿児島市医報は通巻700号を迎えましたが、私は第55巻第7号（平成28年7月）から副編集委員長として、そして第57巻第7号（平成30年7月）からは第14代編集委員長（編集委員長制度を導入した平成8年から数えると7代目）として編集に携わっています。

毎月初旬に編集委員会を開催していますが、基本的には、これまで続いている本医報の編集方針を継承しています。本年4月に編集委員の改選があり、これまでの委員の先生に全員継続していただきました。

これからも、より質の高い誌面づくりに励み、鹿児島市医師会を取り巻く種々の情報を会員の先生方に迅速かつ市虎三伝を防ぐためにも正確にお伝えするように努めていきます。一方では、会員の交流の場としての役割も十分果たすよう、毎巻第1号と第8号にはそれぞれ新春随筆、緑陰随筆特集を企画し、また随時、「随筆」、「区・支部だより」をはじめ原稿を募集しています。これからもご投稿をよろしく願いいたします。

私が編集に携わってから、特に関心を持っている事項を幾つか取り上げてみます。

「各種報告」の最初には、理事会の概要と

第14代医報編集担当理事 長友 医継
(西区・伊敷支部 玉水会病院)

して1カ月間の理事会議事録を掲載しています。本議事録を通して鹿児島市医師会の活動に関心を持っていただきたいと思います。

「附属施設だより」では、毎号、鹿児島市医師会病院の診療・収支実績報告と鹿児島市医師会臨床検査センターの検査・収支実績報告を行っています。会員の先生方には、両附属施設の診療体制や検査項目のみならず、経営状況についても注視していただきたいと思います。

医療事故調査制度は平成27年10月から施行された医療法の改正に盛り込まれた制度ですが、本医師会は診療関連死発生時の相談先として医療事故調査制度サポートセンターを開設しました。毎号に「本センターの案内」を掲載し、先生方への周知を図っています。

今私が危惧しているのは、「鹿市医郷壇」への投句の少なさです。現在7人ほどの方から投句がありますが、うち会員は4人です。鹿児島弁での川柳ですが、最近は鹿児島県民でも鹿児島弁を流暢に話せる人は少なくなっています。投句に躊躇されている会員の先生方も多いのではと拝察しますが、選者に適宜校正していただいていますので、気楽に投句していただきたいと思います。鹿市医郷壇は、第17巻第7号（昭和53年）に鹿市医報狂壇として始まり、以後連綿と続いているコーナーですので、継続させるのは当然としてさらなる隆盛を図りたいと思います。

本医報は、鹿児島市医師会会員への情報提供の雑誌として継続していくものですが、今後も伝統を重んじるとともに新たな取り組みに努めてまいります。

最後に700号の編集担当者名を記して、
この稿を終わります。

編 集 委 員：關根さおり，今村 直人，
森岡 康祐，角 純啓，
寺口 博幸，島田 辰彦

副編集委員長：帆北 修一

編 集 委 員 長：長友 医継

事 務 担 当：原田 苑子，松藤 俊一